

学会欧文誌 ‘Japanese Journal of Mathematics’ 投稿規程

本誌は数学における研究総説論文を掲載する。毎年 1 巻を発行する。1 巻は 2 号から成る。

I. 原稿について

1. 本誌に投稿する原稿は、英語、仏語または独語で書くこと。原稿はコピー共合計 3 部を下記宛送付するか、または、pdf ファイルあるいは ps ファイルを `jjm(at)mathsoc.jp` に送付すること。

〒110-0016 東京都台東区台東 1-34-8

日本数学会 JJM 編集部

2. 著者は原稿の完全なコピーを保有しておくこと。
3. 本文前に英語の **Abstract** を書くこと。ただし、Abstract 内には数学記号や公式等はできるだけ避けること。また、文献表からの番号のみの参照もできるだけ避けること。
4. 1 ページ目の脚注に **2010 Mathematics Subject Classification** (参照: <http://www.ams.org/msc>) による分類番号と **Key Words and Phrases** をつけること。ただし、第 1 分類番号 (Primary) は唯一にすること。
5. 60 文字以内のランニングヘッドを 1 ページ右上余白に明記すること。
6. 原稿は原則として $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ ($\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ 等) で作成すること。(手書きの原稿は原則として受け付けられません。)
7. 著者の連絡先を明記すること。また、共著の場合には校正刷送付先一箇所を指定すること。
8. 投稿論文は、原則として返却いたしません。

II. Aims and Scope

JJM は、日本から発信する高いレベルの国際的数学欧文誌を目指して 1924 年に創刊されました。2006 年からは第 3 シリーズとして、数学に今後の発展を促し、新しい価値を生み出すような研究総説に特化した欧文学術誌としてスタートしました。

JJM は、学問的に高度な内容が明瞭に解説された研究総説の投稿を歓迎しています。具体的には、

- 最近注目されている主題に関して、幅広い観点から新しい洞察を与える
- 長年にわたる重要な分野での、大きな進展をまとめている
- 専門家の小さな輪を越えて、幅広い数学者を対象に書かれている

といった性格をもつ論文を JJM に掲載したいと考えています。

III. 付記

1. 査読の便宜のため、論文中に引用されている未発表文献で重要なもののコピーも原稿に添えて提出すること。
2. $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ で原稿を作成した著者は、掲載決定時の最終提出原稿と完全に同一の $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ ファイルを提出すること。
3. 連絡先の変更は速やかに通知すること。
4. 著者校正は一度だけなので、遺漏なく校正すること。字句の添削、変更はできるだけ避けること。
5. 初校の校正刷返送の際に別刷の希望部数を指定すること。最初の 50 部は無償であるが、これを超える分は有償で受け付ける。表紙はつけない。

参考：論文作成の手引

論文の全体的な構成に注意を払い、読者に読み易いように工夫すること。特に Introduction を活用して、この中で論文の主要な結論を紹介し、既知の事柄との関連を簡潔に述べること。外国語を十分に推敲すること。

I. 論文の構成および原稿の作成について

1. 原稿は A4 判 (ヨコ約 210mm, タテ約 297mm) の用紙を用い、ハードコピーでの投稿は、プリンターによって印字したものを原則とする。T_EX などのソフトを用いて原稿を作成する場合には、行間をあまり詰めすぎないこと。上下左右 3cm の余白を残すこと。

2. 論文を構成する節 (SECTION), 定理 (THEOREM), 補題 (LEMMA), 系 (COROLLARY), 定義 (DEFINITION), 例 (EXAMPLE), 注意 (REMARK) などに適当な番号や標題をつけて系統だったものにすること。

3. 各段落のはじめは改行字下げをすること。定理, 証明, 定義等は上下半行ずつあけること。

4. 数式は独立したものか文中に挿入するものかをはっきりさせ、独立した式の上下は半行ずつあけること。

5. 改行の際は必ず行頭を数文字下げること。ただし、行頭を下げずに改行する場合は明示すること。

6. 見出し語の体裁などは最近の本誌掲載論文にならうこと。論文の標題, 節の題は太字を用い、英仏語の場合は最初の文字のみ大文字とする。著者名は姓名ともに省略せず書く。住所は論文の最後に書くこと。

7. THEOREM, LEMMA, PROOF 等は太字とせず、小キャピタルを用いる。証明の終わりを□で示すこと。

8. 文中の語は省略形 (Th., Cor., w. r. t., LHS, RHS など) を用いず、完全な形で書くこと。数式内で exp, sin, log, lim, max, Im, deg, Ker, Aut, Sign, Ext などの記号を用いるときは立体にすること。

9. 参考文献は体裁をととのえて、本文の後にまとめて示すこと。一論文中原則として通し番号とし、[1], [2], … のような番号を付すこと。この他、[M] 等のキー表示を用いても良い。T_EX などのソフトで参考文献を作成する場合には、活字を小さくし過ぎないこと。

引用論文については掲載雑誌の巻, 年号, 頁まで引用すること。雑誌名の略し方は Mathematical Reviews 巻末, あるいは, <http://www.ams.org/msnhtml/serials.pdf> の略号表にならうこと。たとえば Journal of the Mathematical Society of Japan を J. Math. Soc. Japan と略す。単行本の場合は, 著者, 書名 (シリーズ名, 巻数), 発行所, 発行都市名, 年号の順とする。

文献の表記例

References (あるいは Bibliography)

- [1] K. Yosida, On the differentiability and the representation of one-parameter semi-group of linear operators, J. Math. Soc. Japan, **1** (1948), 15–21.
- [2] T. Kobayashi, Discrete decomposability of the restriction of $A_q(\lambda)$ with respect to reductive subgroups. Part II. Micro-local analysis and asymptotic K -support, Ann. of Math., **147** (1998), 709–729.
- [3] T. Kobayashi, K. Ono and T. Sunada, Periodic Schrödinger operators on a manifold, Forum Math., **1** (1989), 69–79.
- [4] I. Satake, Algebraic Structures of Symmetric Domains, Publ. Math. Soc. Japan, **14**, Iwanami Shoten, Tokyo; Princeton Univ. Press, Princeton, NJ, 1980.
- [5] D.A. Vogan, Jr., A Langlands classification for unitary representations, In: Analysis on Homogeneous Spaces and Representation Theory of Lie Groups, Okayama–Kyoto, 1997, (eds. T. Kobayashi, M. Kashiwara, T. Matsuki, K. Nishiyama and T. Oshima), Adv. Stud. Pure Math., **26**, Math. Soc. Japan, 2000, pp. 299–324.

本文中では Satake [4], Vogan [5], あるいは [4], [5] というように引用する。

10. 脚注を用いる場合は、文中で対応する語の右肩に 1), 2), … のような番号を付すこと。脚注より、注 (REMARK) として文末にまとめて記す方が望ましい。

II. 数式, 記号, 文字指定について

1. 複雑な記号はできるだけ避けること。たとえば、作字した文字, 標準的でない文字, 極端に小さい上ツキや下ツキの文字, 多重根号などである。

2. 数式はなるべく行の幅が広がらないようにすること。

3. 上ツキ(下ツキ)の添え字に複雑なものあるいは上下の幅の広いものを用いないよう, たとえば, $\exp\left(\int f(x)dx\right)$ や $x^{[m/n]}$ と表記するなどの工夫をすること。

4. 記号としての下線 (lim など) の使用は組版上の指定と紛らわしいのでなるべく避け, やむを得ず用いるときは特に明記すること。

5. 図, 表は原稿中に挿入希望場所をはっきりさせること。図は丁寧に明瞭に書くこと。必要があれば, 余白に細部についての説明を加え, 線の太さ(太, 中, 細)も指定すること。

6. 原稿を $\text{T}_\text{E}\text{X}$ で作成していない場合には, 2部のうち1部にギリシャ文字, ドイツ文字, スクリプト文字, ボールド文字をはじめとして, その他の特殊記号等を指定しておくこと。

ギリシャ文字 ……………青丸で囲む。

ドイツ文字 ……………赤丸で囲む。

スクリプト文字 ……………緑丸で囲む。

ボールド文字 ……………赤波線の下線。

立体 ……………赤い四角で囲む。

7. 原稿を $\text{T}_\text{E}\text{X}$ で作成していない場合には, 下記のような紛らわしい文字や記号の区別をはっきりさせ, 赤で説明を加えること。

1 と l , 0 (ゼロ) と O , \cup と U , \vee と V , \wedge と Λ , \emptyset (空集合) と ϕ , \in と ε , x と \times (かける記号), Δ と \triangle (ラプラシアンなど), \backslash (商などに用いる斜線) と \setminus (差の意味の斜線), 下ツキ添え字の 0 と O と o など。

III. $\text{T}_\text{E}\text{X}$ 入力に関する参考文献

- [1] 相川弘明, How to write mathematics in $\text{T}_\text{E}\text{X}$ I, II, 数学, **45** (1993), 76–83, 164–171.
- [2] 小林昭七, 数学論文の書き方 (英語編), 数学, **39** (1987), 349–354.
- [3] 丸山正樹, $\text{T}_\text{E}\text{X}$ 入力についての注意, 代数幾何学シンポジウム講演記録 (東北大学), 1996, 169–175.
- [4] 野水克己, 数学論文のための英語案内, サイエンス社, 1993.
- [5] 小田忠雄, 数学の常識・非常識 — 由緒正しい $\text{T}_\text{E}\text{X}$ 入力法, 数学通信, **4**, No.1, (1999) 95–112.
- [6] The Chicago manual of style, Univ. of Chicago Press, 14th ed., 1993.